

## フランス共同ゼミ「パリ・ディドロ（第7）大学とお茶の水女子大学：日本学の新たな構築の試み」 概要報告

お茶の水女子大学教授 中村俊直

開催日：2008年1月14日～15日

開催場所：パリ・ディドロ（第7）大学、フランス国立高等研究院（於・ソルボンヌ大学）、コレージュ・ド・フランス

参加者：古瀬奈津子（お茶の水女子大学教授）、中村俊直（同教授）、ロール・シュワルツ＝アレナレス（同准教授）、西岡亜紀（同アカデミック・アシスタント）、諸井彩子（同博士後期課程学生）、鈴木朋子（同博士後期課程学生）、伴ゆりな（同博士後期課程学生）、野田有紀子（同リサーチ・フェロー）、矢越葉子（同博士後期課程学生）、重田香澄（同博士後期課程学生）（以上10名）

2008年1月14日にパリ・ディドロ大学において最初の共同ゼミが行われた。パリ・ディドロ大学は今年の秋にお茶の水女子大学と交流協定を結んだ大学であり、その意味においても、この二つの大学の共同ゼミは意義深いものと言えよう。

まず最初にホリウチ教授（パリ・ディドロ大学）とシュワルツ准教授がそれぞれこの共同ゼミの意義を述べられた。その後、午前はホリウチ教授、午後はサカイ教授（パリ・ディドロ大学）の司会のもとに、日本側5人とフランス側3人の発表が行われた。フランス側はパリ・ディドロ大学日本研究学科で学ぶ修士課程と博士課程の学生たちであった。いずれも立派な日本語での発表であった。8人の発表者の発表テーマは、文学、歴史、思想、民俗学、社会学といった多様な領域にわたり、また、発表の後にいずれも活発な質疑応答がなされた。発表者以外にも、パリ・ディドロ大学の教員や学生たちも出席しており、その中には、ダニエル・ストリューヴ准教授、アルノー・プロトンス准教授といったパリ・ディドロ大学の日本学の専門家たちの顔も見られた。最後に古瀬教授が全体の講評を行い、パリ・ディドロ大学側に、このような共同ゼミの開催の場を提供していただいたことに対して感謝の念を表明した。

この共同ゼミの発表者は以下の通りである。（発表順）中村俊直、諸井彩子、西岡亜紀、ジェラルド・ブルー（パリ・ディドロ大学博士課程学生）、鈴木朋子、コリーヌ・セルモ（パリ・ディドロ大学修士課程学生）、トリスタン・ブルネ（同博士課程学生）、伴ゆりな。

その後、古瀬、中村、野田、矢越、重田の5人は、パリ・ディドロ大学からパリ・ソルボンヌ大学に移動し、フランス国立高等研究院のシャルロット・フォン・ヴェアシュア教授が行っている二つの授業を、他の一般学生とともに聴講した。最初の時間は『延喜式』主計寮式・上に関する授業であり、二番目の授業は『三善清行意見十二箇条』に関するものであった。どちらもたいへん有意義な講義であった。

他の学生達はそのままだり・ディドロ大学に残り、同大学の日本学関係の蔵書を見学した。

夜は二つの大学の教員と学生がカルチエ・ラタンにあるブラスリーで食事をしながらさらに交流を深めた。

翌日の1月15日には、まず、ヴェアシュア教授の案内で、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所所有の日本学関係の蔵書を見学した。

その後古瀬教授とヴェアシュア教授の司会のもとに共同ゼミが開催され、日本の古代史に関して、お茶の水女子大学の3人（野田有紀子、矢越葉子、重田香澄）が発表を行った。いずれも高い評価を受けた発表であった。この共同ゼミには、セキコ・プチマンジャン＝マツザキ（コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所長）、ミシェル・ヴィエヤール＝バロン（国立東洋言語文化学院教授）、エステル・ポエール（同准教授）などの日本研究の専門家たちも出席していた。

発表終了後、やはりカルチエ・ラタンにあるアール・ヌーヴォー様式の内装のレストランで、フランス料理を味わいながら一同2日間にわたる共同ゼミの疲れをいやした。